

## 新著紹介

### ○辻村理學士の日本地形誌を讀みて

此の新著の紹介なり批評なりは已に本誌前號で匿名氏N氏によつて鄭重に述べられたので此上の批評などは必要とは思はれぬがなほ別の匿名者等により同じ書に對し遠慮のない第二第三の批評や質問の出てと云ふ事は斯學が進歩する上から云つてもよい事と思ふ。特に著者が問題集として之を學界に提供された好意から考へてもそれは最も適當ではないかと思ふしかし本書の著者は以前から難文章を愛好されて居たと云ふやうな事情もあるので茲に批評とか紹介とかば中止し、本書の中で特に僕等に難説難解の點を擧げ、一つの質問集の意味でそれを遠慮なく公表してお尋ねしたいと思ふ。

第一此著の中によく引用された「近い時代」「古い時代」「比較的近期」「比較的近代」反對に「古い時代」「舊い時期」……云々の多様の言葉は可なり制限なく又斷りもなく用ひられて居るやうに思ふが、地質學書を讀みつけた人々にはそれを何んの意味に解するかに苦しむかと思ふ。或地質學者等は此の判じものゝ如き文字が頻に出沒することの爲に自己の地質學的智識の有功さへ疑ふかもしれん。

同じ新をつけた字の中でも或所では地質時代以後のやうで他の所では以前のやうに考へられる所がある。假りに時とか

時期とか云ふ字のうちに地質時代の或時期をあらはすものがあるとする、多數の時代に關する地質的用語に恵まれ過ぎて居る人々は著者の此の新語を咀嚼する爲め少なからず煩悶するに違ひない。況して地質時代以後も包括したのでは益々迷宮となる。新期と舊期の境界になると全く暗黒に這入る此の苦痛は他の學者の味ひ得ない地質學的苦痛とならう。

中央線により内帯外帯に區分するのは約束のやうなものである。問題はその位置關係にあるだらう。此の點はあまり取り立てるほどの事もない。しかし著者が本書の議論の中心として撰定されて居る。西南日本なる部分に就ては何人も容易にその區域を捕捉し兼ねやう。わかつた問題と云ふ人があるかも知れんが却々そうではあるまい。單に何人かの西南日本の稱を襲用したとすればそれは無難な語であるが同一章時には同一頁に西南日本と南日本なる別名の區域が現はれて居る。兩語の關係は勿論のこと、兩語共何人のを襲用したのかに全く自製に基くのに迷ふ。

西南日本類似名の南日本、東北日本類似名の北日本、此の二つは原著の意をうけたとすると嚴密の意味では地理的構造の機構的成因的地史的意義は必ずしも同一ではない。僕等の考では此の二語を一緒に取り交せて書く理由も必要もないやうに思ふ。

假りに西南日本と南日本とが同一地域を指示するとしても已に西南日本の地形的地誌序論であると云つて居り、場所によると西南日本の肢節と云ふ大きな標題を掲げて居るのに、

すく其何行か先で斷りもなく(○)南日本を並べてゆく必要さについてばなほさら疑はしい。東北日本に對する北日本も同様である。内帶と、北、外帶と南帶の濫用も同じだと思ふ。

著者は緒言に於て此の著は「日本地誌」ではなく「西南日本の地形學的地誌序論」であると書いて居られる。其の意に於て第五章「島弧の形成」第六章「地震帶及火山帶」及第七章「地形發達史」等をも途中で當然起る疑問は著者の所謂島弧の意である。此の書を読み恐らく著者の云ふ「島弧」或は「日本島弧」とは如何なる部分であるかを明らかに判じ得る讀者は少いかと思ふ。我國地相論には已に南緯及び北緯等の名稱が出来て居り、本州島の外形のみで之を一變一弧と見做す學者は極めて稀である。一方では全然然らずとする學者さへある。

以上色々の見方の中で特に著者が島弧と呼びたい部分が若し他人のものと相異するとせば勿論其の區域についての概要をのべて貰はなければ讀者に分る筈はあるまい。これは議論を進むる根本の問題にならう。尤も「地震帶及火山帶」なる章で次記の一文が擧げてある。

「著者は前章に於て假に中央線に對する縱横の斷層線を區別したが地震帶の分布に就ては新しい地震運動の表現である島弧の方向を決定するのが合理的である」云々。

之によると要するに所謂「新しい地震運動の表現である島弧」とは中央線に平行せざるものと認め得るから著者の島弧の意は原田博士の南緯等に非ずと見える(七九頁)

尙ほ一つ七十八頁に於いて次の如き文字を見る。即ち

「日本で濃尾地震に際して起つた水平移動の向きも島弧の屈曲から考へられるものとは反對で云々」

是等の文は原田博士の南緯ではなく西南日本と東北日本の二つを含むものらしい。然るに或る頁には

「南日本の水平的肢節を全體として見れば環太平洋地域に多い弧狀列島である云々」

と書いてあるから南日本だけを一弧と云ふやうにも聞こへる又或る頁では「南日本南帶の褶曲弧」と云ふやうな全く趣のちがつた弧の事が書いてあるやうである。

それから別の頁に於て

「日本本州島の地質構造線が其の外形と一致しないと云ふ理由だけで此れを褶曲弧で無いと斷定するのは危険である云々」

と云つたやうな風で此の著者の島弧に關する區分は二通りにも三通りにも解されるものであるから時代わけ(○)にでもして裁かなければ却々の島弧の捕捉は容易なことでない。現在に於ける地質構造的大地形の區分は島弧の位置をそれほどいまいに、云はねばならぬほどボケタものとは思へない。若し著者一人で決し兼ねると云ふ意味ならば他人の學說を紹介し羅列するだけでも、よりよき一頁、朦朧ならざる一頁をものし得るかと思ふ。

兎に角本州島が一弧として「新しい力の表現である」と斷定した此の著者の創見の論據はどこにあるかと云ふ事は更に

第二の大きな問題とみてよいと思ふ。

本州島全體を一弧と見るのは意見として何も遺慮する必要のないやうに思ふ。たゞ他の學說を否定する理由だけは根本の問題だからハツキリ書くのが本當のやうに思ふ。科學は文學ではない。イグノラントを蔽ふ道具とも思へない出来るだけ卒直に簡明直截の方法を尊ばねばならぬ。ハツキリ書いてはお里が見すかされるやうな怪しい記事と云ふ意とは思はれない。しかし上の新創見を主張するほどの必要さかどこにあるかに迷ふ。本著には地震帶論にも火山帶論にも何も支障を生ずるやうな記事を見ない。又あつても兩様に解釋される程度をやうに思ふ。寧ろ其の反對になるやうな記事や事實が譯山記されて居ないか。例へば山崎博士の近著には特に地震の見地から本州島を一弧と見る事の謬想たることが力説してある。關東地震なども著者は東北日本だから觸れぬと云ふ意味かもしれないが西南日本に直接接觸した所でもあり島弧問題には所謂著者の最近の力の表現と見得るものだから重要だと思ふ。特に本州島弧が新しい力の表現の形だと云ふ論証には是非とも一顧に値する。若しも島弧論と地震帶論とを眞に考へないならば。

地震現象によつて著者の島弧を論ずる考ならば少くとも本州島全體の智識を基礎とす可きものと思ふ。西南日本丈の智識で著者の云ふ島弧を論ずる事は少しく樂觀的ではないだらうか。

理由を明記しない賛成も反對も共に一種の獨斷となりはし

まいか。五十六頁でリヒトホーフエン説に對し小川博士ロレンツが反對した云々と書いてあるのは事實ではある。しかしこれ等の學者が弧狀山脈の内部構造のみ重要視した爲めにリヒトホーフエン説に對し甚しい誤解を抱いて居る云々と書いてある此の一文をよんで謂ふ所の小川博士等が何を甚しく誤解して居るかわかる人は少なからうと思ふ。特に甚しくと云ふ意味がわかりにくいやうに思ふ。

近來地質學者は日本の第三紀褶曲にヤ、著しいテツケン構造やスラスト構造を報告して居る(之れ著者は薄殼型と譯してある種類のもの)。一體著者が所謂「新しい時期」の褶曲に薄殼型のものなしと云ひ居るのほどこの第三紀層を指して居られるのだらうか。

九十四頁に「新しい時期の褶曲は緩慢な性質を帯びたものであつたか、或は波長の大きい褶曲で斷層を伴ふものが多い云々」とある。已に西南日本に於いても反對事實の報告はある著者の云ふ島弧が本州島全體を含んだものだとなれば尙更其の弧には著しきスラスト構造の例が報告されて居る。若し著者の弧狀山脈の造山型が薄殼型だとか原殼型だとか云ひたいとなれば其の島弧の狭き一部分を論じてそれを本州島全體論に押しつけることは無意味のやうに思ふ。

著者はアメリカやセレベス、ヒマラーヤ等を引用し頻りに日本に類似せる點を擧げる。然し日本に最も近縁なる東北日本や石狩炭田のテツケン構造及スラスト構造に關する諸論文を何故引用しないであらうか。是等は地質學を理解しない爲

に起るやうな事ではないかを恐れる。

最後に云ふのは此の書の可なり重要部分と思はるゝ準平原問題である著者は Plain と Plate の意味をどの程度まで明瞭に區別せるやに迷ふ。日本の隆起平表面を準平原 Penplain の遺物と見るや否やは最近著しく議論が進んでゐる。

それに關する記事も出て居るほどであるが此の問題に向觸れたと思はるゝ記事が見當らない。特にお尋ねしたいのは原著が決して準平原と云ひ居らず。或は準平原と云ふも其の理由を明記してをり。又殊更らに其の用語を避けて居る問題に對し著者は遠慮なく Penplain として之れを引用し又文獻にまで擧げられた事である。何んとしても原著者の意に反する誤つた記事を報道する事は少し妙でなからうか。かやうな原著の意味を取違へた記事が外にも少からずある。

本書は上述の理由からまだ途中までしか讀まなつたが序ながら其の範圍内で用語の不統一らしいものが可なり目についた。前述の如く西南日本と南日本、東北日本と北日本、機樁と機巧、外帯と南帯、内帯と北帯、プロツクと地塊と云ふ如きどちらか一つですむものであつて二種を出すのは寧ろ濫用と云つてよいやうに思ふ。他人の文章を引用する場合には宛に角自分で同じ現象と思はれるものに二通りの術語を使用するは何んとみても必要とは思へない。

誤植も普通より少ないやうには思へない。一々擧げては大變であるが特に地名の誤りと思へるものが非常に多い。之れは本誌の御紹介にも四十箇所ながしの誤記を見つけて居ら

れるやうだが此の尋常でない讀圖(?)に加へ僕等の拾つたものを併せれば更にそれ以上賑やかなものになるかと思ふ。是等の中には誤植と思へないやうなのが深山にあるのが一層變な氣がする。

日本の地名はそれとして有名な外國の地名人名にも誤りがまけずにある。特に本書は英文ではない。余り多くもないローマ綴に誤植が多いのは見つともない。一寸見ただけで Tun-hai, Wegner, Schmitthener, Elysch, Taylor 等々。其の内でも Tunghai を Tunkhai としてたり Taylor を Tayler として事などは單なる誤植と思つてくれぬ人が出來やう。伊木理學士も少しおかしい(二八頁)それよりも少々深いのは日本人名前が間違へて書いてある事である。折角著者に引用して貰ふ光榮を有した人々は自分の論文を間違へて拔萃された以上妙な氣もちになつて仕舞ふ。いつそ文獻を載せないならば宛に角、文獻の上げてない渡邊理學士も門外漢には誰の事だかわからない人が多からう。同時にもう少し地質調査所邊の人名(すききらいは別とし)其他にも引用できそやうな論文があるやうな氣がする。特に準平原は日本のやうな不安定な所には出來得ないと云ふ論文などは大切のやうに思ふ。尤も之れは誤讀や粗讀をしない事にしておすゝめするのであつて著者のやうに翻譯紹介や拔萃を大きな生命にして居られる學者には特に外國ものばかりでなく、日本ものも出來るだけ偏しない卒直な自由な且つ正しい熟讀と引用を願たいやうに思ふ之れは第二第三の増刷だけではなく更に次に次から次へと出る名

著に對しても切にお願ひをしたい點である。(日本橋區の)  
讀者(學團は本執筆者の氏名を承りたし)

## 新 著 即 報

- ◎第四十七回日本帝國統計年鑑 内閣統計局 昭和三年十一月  
月 金二圓五〇錢
- 鐵業 第六卷第六〇號 二月  
石炭の加工工業(一)(辻元謙之助)  
支那のアンチモニー(加藤武夫)
- ◎都會と田舎 小田内通敏著 日本兒童文庫第六十二篇  
アノム發行 二月
- Palaeontologia Sinica. Series A. Vol. II Fascicel.*  
*Peking* 1927. \$18.  
Palaeozoic Plants from Central Shansi. (T. G. Halle)
- Palaeontologia Sinica. Series. CVol. IV. Fasc. 2.*  
*Peking* 1927.  
Die Hipparionen Nord-Chinas. (Ivar Sefve)
- Palaeontologia Sinica. Series C. Vol. IV. Fasc. 3.*  
*Peking* 1927.  
Ueber Quartäre und Jungtertiäre Rhinocerotides  
aus China und der Mongolei (Torsten Ringström)
- Palaeontologia Sinica. Series C. Vol. IV. Fasc. 4.*  
*Peking* 1927.  
Weitere Bemerkungen über fossile Carnivoren aus  
China (Otto Zdansky)
- Palaeontologia Sinica. Series C. Vol. V. Fasc. 1*  
*Peking* 1927.  
Weitere Bemerkungen, über fossile Cerviden aus  
China (Otto Zdansky)
- Palaeontologia Sinica. Series C. Vol. V. Fasc. 3.*  
*Peking* 1927.  
Fossile Nagetiere aus Nord-China (Chung-Chien  
Young)
- Palaeontologia Sinica. Series C. Vol. V. Fasc. 4.*  
*Peking* 1928.  
Die Säugtiere der Quartärfauna von Chou-K'ou-tien  
(Otto Zdansky)
- 第九卷第二號 二月  
關の國學大觀の譯者(田中善也)
- Zeitschrift für praktische Geologie. 37. Jahrg.*  
*Hft. 1. Jan.*  
Nephelein (N. I. Wlodawetz)
- Petermanns Mitteilungen. 75. Jahrg. Hft. 1/2 1929.*  
Die Noble-Nordpolexpedition mit dem Luftschiff  
(L. Breitfusz)
- Die Lösstheorie von L. S. Berg. (H. Anger u. L.